

私の一冊

歯科衛生学科 山本智美 先生

D・カーネギー著 『人を動かす』

小鹿図書館 : 159/C 19 (創元社)

社会人になりたての頃は失敗の連続で、自分自身に落ち込むことが多かった。また自分のことだけではなく、仕事での人間関係で気持ちが落ち込むこともあった。しかし、幾つになってもその時々で仕事や役割も変わり、出会う人も移り変わっていく。「私の一冊」を依頼されたのがこの3月、学生の皆さんにとっては進級、卒業、新たな旅立ちの時期であることを考えると、これからの生活の中でこの本をそっと手に取っていただく機会があれば、と思いペンを執った。

世界各国で翻訳され 1,500 万部を売り上げたベストセラーである著名なこの本を、「私の一冊」というにはお恥ずかしい限りであるが、人間関係の古典としてさまざまな自己啓発本の原点ともいわれており、文章はわかりやすく、多くの人々の心を動かす本であると思われる。『人を動かす』と聞くと、何だかとても“上から目線”のここのように思えるが、決してそうではない。この本は、人と関わるためには自分が変わること、相手の気持ちを引き出し、そして相手もおのずと変わっていく、そして人間関係が円滑になっていくことに気づかせてくれる。

『人を動かす』は、4つのパートから成っている。目次を記すと、パート1では“人を動かす三原則”として「盗人にも五分の理を認める」(批判も非難もしない。苦情もいわない)、「重要感を持たせる」(率直で誠実な評価を与える)、「人の立場に身を置く」(強い欲求を起こさせる)とある。パート2では“人から好かれる六原則”として「誠実な関心を寄せる」「笑顔を忘れない」「名前を覚える」「聞き手にまわる」「関心のありかを見抜く」「心からほめる」とある。パート3では“人を説得する十二原則”として「誤りを指摘しない」「誤りを認める」「おだやかに話す」「しゃべらせる」「思いつかせる」「人の身になる」…等、パート4では“人を変える九原則”として「まずほめる」「自分のあやまちを話す」「命令をしない」「顔をつぶさない」…等など、いずれもそれにまつわる実話等を引用し、わかりやすく説明されている。

初めてこの本を読んだ時、カーネギーの説は私にとってまさに「目から鱗」であった。そうするのがよいとわかっている、心から自分には実践できていたのだろうか…。自分なりに経験も積んできたつもりであったが、実はそれは単なる自己満足ではなかったか…。これまでの自分を振り返り、心から反省したものである。年齢を重ねても、これらの原則を忘れてはいけなと切にそう思った。もちろんカーネギーの説には賛否両論あると思うが、人間関係を築いていくため

の基本的な姿勢には、一本筋が通ったものがあり、共感できる部分がいくつかあると思われる。

この本と最初に出会ったのは二十年程前ではあるが、今でも時々手に取ることがある。本を読むというより、原則が書かれている目次を開き、「そうそう、そうなんだよね…」と一人納得しては本を閉じる。思っている言葉や態度に表せないこともあり、書かれている言葉をかみしめ、今度は…と自分に言い聞かせている。

社会人一年生の頃、仕事に慣れ充実感を感じる頃、仕事や人間関係で悩む時、家庭をもち父・母、夫・妻など、さまざまな顔をもつ頃、これからの人生の時々で、ふと開いてみると何か気づかせてくれる本であると思うのである。幾つになっても、常に人と人とが関わることで、自分が変わり成長させてもらっていることを忘れないようにしたいと思う。